

間質性肺疾患における咳関連QOL、胃食道逆流症状の関連

美甘真史¹⁾、野口理絵¹⁾、望月栄佑¹⁾、櫻井章吾¹⁾、穴戸雄一郎¹⁾、秋田剛史¹⁾、森田 悟¹⁾
朝田和博¹⁾、藤井雅人¹⁾、白井敏博¹⁾、須田隆文²⁾、千田金吾²⁾
静岡県立総合病院呼吸器内科¹⁾
浜松医科大学第二内科²⁾

【背景と目的】間質性肺疾患において慢性咳嗽はよくみられる症状であるが、咳関連QOLについては十分に検討されていない。一方、胃食道逆流症 (GERD) は間質性肺疾患に合併することが少なくなく、GERDの治療が予後を改善する可能性も指摘されている。今回、間質性肺疾患患者における咳関連QOL、GERD症状の関連について検討を加えた。

【対象と方法】対象は当院呼吸器内科に通院中の間質性肺疾患患者56例 (男性31例、女性25例、年齢中央値:71 (34-86) 歳)。受診時に、Leicester Cough Questionnaire (LCQ) 日本語版 (訳者:新実彰男先生、小川晴彦先生)、Fスケール問診票 (8点以上をGERDと判定) を実施し、またHRCTから気腫化、線維化の程度を視覚的にスコア化し、患者背景、各種検査との関連について検討した。

【結果】IPFが21例、その他の特発性間質性肺炎が15例、二次性が20例であった。LCQ total scoreはmean 17.93、 < 21 は50例 (87.7%)、Fスケールはmean 3.55 (0-31)、 ≥ 8 は9例 (15.8%) であった。LCQ total scoreはFスケールと有意な弱い負の相関 ($r=-0.265$)、BMIと負の相関 ($r=-0.329$)、線維化スコアと負の相関 ($r=-0.399$) を認めた。

【考察】間質性肺疾患患者において、GERD、肺の線維化が咳嗽に関与していることが示唆された。